地域で活かされる
長崎大学の
知
Knowledge of Nagasaki University
Vol.6

長崎創楽堂 アートマネジメント

文化芸術の作り手と受け手をつなぎ、文化をマネジメントする人材を育成する

昨年11月に復活した第5回マダム・バタフライ国際コンクールin長崎（主催／Nagasaki Opela Plan 21実行委員会・長崎市）。本選の入賞者の記念コンサートではアートマネジメント受講者もサポートで加わりました。長崎港を見下ろすグラバー園会場で素晴らしい歌声が披露されました。写真は優勝したハオ シンワさん（中国）

教育学部 芸術表現
堀内伊吹 教授
Ibuki Horiuchi

東京芸術大学音楽学部器楽専攻卒業。一九九九年より長崎大学教育学部芸術表現教授。二〇一一年より副学長（兼務）。専門分野は芸術（ピアノ）、美学・美術史（芸術学）。長崎県音楽連盟理事・運営委員長。二〇一三年「長崎の唄、長崎の音Vol.1～3」CD制作。

長崎の芸術文化活動を活性化させるアートマネージャーの育成

長崎大学教育学部の小ホール「長崎創楽堂」を拠点に、今、次々と興味深いイベントが行われています。ある時は文化庁メディア芸術祭大賞受賞アーティスト岸野雄一さんによる地域密着型イベントの特別講義。また、ある時は米国クリーヴランド管弦楽団のバイオリン奏者橋爪美穂さんのレクチャーコンサート。ここでは、演奏の合間に米国の音楽事情や地域と文化をどう結び付けるかというテーマのトークもありました。長崎大学教育学部出身でテレビドラマのサウンドトラックを手掛ける若手作曲家得田真裕さんが作曲の舞台裏を語るイベントも好評でした。これらは文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業」の一つである「長崎創楽堂アートマネジメント講座」の一環です。

仕掛け人ともいうべき実施責任者である堀内伊吹教授にお話を聞きました。

「二〇一二年に完成した創楽堂に、あえて『創』の字を使ったのは、文化創造の拠点にしたいという思いがあったからです。その後、文化庁で大学を拠点にした文化推進事業を募集しており、手を挙げて採択されました。日本には全国各地に大小のホールがあり、市や県には文化振興課もありますが、地方の文化活動は必ずしもうまくいっているとは言い難い。これは文化をマネジメントする人材が十分育っていないからだといわれています。ご存じのように長崎でも、マダム・バタフライ国際コンクールは一時中断され、ながさき音楽祭も七年で廃止と、客が入らないという理由でクラシックコンサートもずいぶん減りました。長崎市の文化関係者は往々にして『手詰まり感』を感じています。そこで、文化庁の応援をいただいて、大学を活用しながら現場で人を育てていくプロジェクトを企画しました」。

確かに、大きなホールがないとかお金がないとか、ネガティブ思考にとらわれると身動きが取れなくなります。講座のキャッチフレーズは「出島の地長崎における、人と作品をつなぐアートマネジメント」ですね。実際にはどのようなことを行っているのでしょう。

「コンサートというよりレクチャーや勉強会の要素が強いですね。先進事例の取り組みを知って、企画の立て方、地域の巻き込み方、資金の集め方などを勉強会形式で学んでいます」。

二〇一五年度は十五人の講師を呼んで三十の講座を行い、八回の公演の来場者総数が千人を超えるなど、精力的に活動しています。

大学は地域の文化創生拠点 長崎固有の文化芸術を開発していく

受講生はどのような方々が来られるのですか？

「ホール関係者やアーティスト、楽器や歌のレッスンを行うレスナーの方々、一般市民や学生など、延べ一五〇人以上になりました。少しずつ周りの人を巻き込んで、だんだん増えているんですよ。考えてみると、これまではみんなバラバラに活動していて、こうして一堂に会して議論する場がありませんでした」。

受講生にもお話を聞きました。長崎県音楽連盟副運営委員長の林田賢さんは「これまではチケットを売ることに必死になっていましたが、集客も長期スパンで考えて、シリーズものを仕掛けてファンを逃さないなど、現実的な手法を学べました。実践して効果が出ています」と語ります。「つい盛りだくさんになってぼやけてしまう企画も、整理すればすっきりして伝わりやすい。広告のプロの手法や企画の立て方も学べました」と話すのは長崎県美術館でライブを担当してきた建石久美子さん。また、チトセピアホール館長の出口亮太さんは「芸術を普及することばかりに熱心になると広報がおざなりになるなど理論と実践のバランスが難しい。この講座で学んだことは現場にフィードバックできます」とのこと。どなたも、このプロジェクトで学んだノウハウだけでなく、この機会にできたネットワークを文化活動に生かしていきたいといいます。堀内先生のお話です。

「そういう公的な交流の場づくりという意味では、大学は集まりやすくて機能しやすいですよね。昨年は十一月に行われたマダム・バタフライ国際コンクールとも連携して長崎県美術館やグラバー園で入賞者に歌ってもらうなど、長崎の街を舞台に音楽イベントを行うお手伝いもできました。これまでは勉強会が中心でしたが、これからは少し整理して長崎の持っている多くの素材を再編集して伝え方やつながり方を考えたい。来年は実際に自分たちで新しいイベントを企画してみようと思っています」。

大学の役割の一つに人材育成がありますが、その対象は学生とは限りません。大学が拠点となって地域の中から地域文化や産業を支える人材を育成できるということを、アートマネジメントの活動が実証しました。

アートマネジメント講座の1コマ。長崎大学在学中からバンド活動をしていた3人が一堂に会しました。右から、日本テレビ系ドラマ『家売るオンナ』『花咲舞が黙ってない』などの番組サウンドトラックを手掛ける得田真裕さん、パーカッショニストとして活躍中の吉本啓倫さん、OMURA室内合奏団のビオラ奏者である小林知宏さん。セッションでは現役の在学生もゲスト出演しました。

長崎創楽堂
文教キャンパス 長崎市文教町1-14
長崎大学教育学部音楽棟
手続先／長崎大学財務部財務管理課
文教地区会計班（教育担当）
TEL.095-819-2264
収容人員／100席程度
http://www.n-music.net/index.html